特集・農場の衛生対策を考えよう

ウェルカムな分娩舎管理

千葉県・なのはなベテリナリーサービス　福井利恵

はじめに

読者の皆さま、こんにちは。なのはなベテリナリーサービスの福井利恵です。

今回は、ウェルカムな分娩舎管理というテーマでお届けします。

まず、何がウェルカムか？　ということです。ウェルカムというのは、歓迎する、という意味です。

何をするにも、このウェルカムなあり方で作業をする、という考え方。そうすると、自分もハッピーですし、豚もハッピーです。

母豚にウェルカム！

まず、母豚にウェルカム！　ですが、**写真1**の母豚を見てください。農場に伺ったときに、私に好奇心を見せて、顔を突き出してきました。豚は本来好奇心旺盛な動物で、こうして人に好奇心を見せるのは、豚本来の能力が発揮されていると考えてよいでしょう。逆に、ストレスを感じていたり、人を怖がる場合は、何か豚自身がストレスを感じているか、人がまずいことをやっている場合が考えられます。

では、ウェルカムなあり方を前提に、母豚の管理の仕方を見ていきましょう。

⑴母豚が「この分娩舎、いい感じ～」と感じるのは、どんな時でしょう？

あなたはどんな環境、空気、どんな餌がよいと思います？

分娩舎の温度が、例えば三〇℃以上だったら、母豚は暑くて、口をあけて呼吸をしだします。これでは、豚は心地よくないですよね。

分娩舎の温度は二〇℃前後に保ち、隙間風がないように、換気を季節に合わせてしっかりしてあげましょう。

水は、世界のアニマルウェルフェア標準（例えばイギリス）だと一分当たり一・六ℓ以上といわれていますが、日本では一分当たり二ℓが目安に指導されることが多いようです。個人的には、どちらでもよいと思います。餌は、痛んでいないものを与えるのは当たり前ですが、豚が喜んで食べないようなものは、よくないですよね。豚がよく食べて、栄養がしっかり補給されるものを与えてください。

⑵子豚にウェルカム！

次は、生まれてくる子豚にウェルカム！　です。

イメージとしては、子豚が、「わーーい。生まれてきてよかった^^」と思える管理をしましょう。

ウェルカムな管理ができているか、の子豚からのサインは、子豚らしくよく遊び、しっかり育っていることです。簡単ですね。

では、私たちの管理でどうしたらウェルカムな管理ができるか、見ていきましょう。

①生まれてくる子豚へ、まずしてあげられること。

体が羊水で濡れていますので、羊膜をはがして、水分を取ってあげましょう。

体温が一℃下がってしまうと、四日かかっても体温がもとに回復しな

いという研究発表があります。

また、哺乳子豚の体温が下がると、母豚の体から離れづらくなる傾向があるため、圧死の可能性が高まります。

そして、イギリスの統計では生まれたときの活力が少なくて、死亡してしまう事故と外傷によるもの（つまり圧死）が哺乳中死亡の中の三割を占めます。ですから、すぐにミストラルなどを体中につけて水分を吸収し、保温をしてあげましょう。

生まれたときの保温温度は三五℃程度がよいでしょう。

②初乳は六時間以内に飲ませます。

里子は必ず初乳を飲ませた後に実施します。リンパ球などの細胞性免疫を担う細胞の吸収が本当の親じゃないとできないとされているからです。

子豚が迷子になっていたら、乳の近くへ誘導してあげましょう。いうまでもないですね。

里子は、しっかりと新しいお母さんとうまくやっていけるまで面倒をみる気持ちで。

他の豚に邪魔されないように、一度母豚と里子した子豚だけで分割授乳をして数分様子をみます。

里子が母豚になれたら、他の子豚も入れます。そして、里子が群の中でうまくやっていけるかどうか、見届けます（**写真2**）。

③子豚にウェルカム。これから健康に育つためにすること。

▼鉄剤：貧血を防ぐ。

▼歯を切る：尾を切る。

▼去勢：肉質のため。

ここでの取り扱いは、特に大切に。私たちが扱っているのは、命です。放り投げている方は、いますぐなおしてくださいね。

本来、豚が生きていくために必要ないはずの作業です。人間が育てる都合で行う作業です。ここで余計なストレスをかけないように。

特に問題なることが多いのが、注射針や器具の衛生管理です。毎回消毒をする、歯を切る、去勢をするニッパーはそれぞれ別のものを使いましょう。

毎回使用後は、きれいに洗って、消毒をしましょう。煮沸消毒は、洗い落とせない部分に詰まった組織を

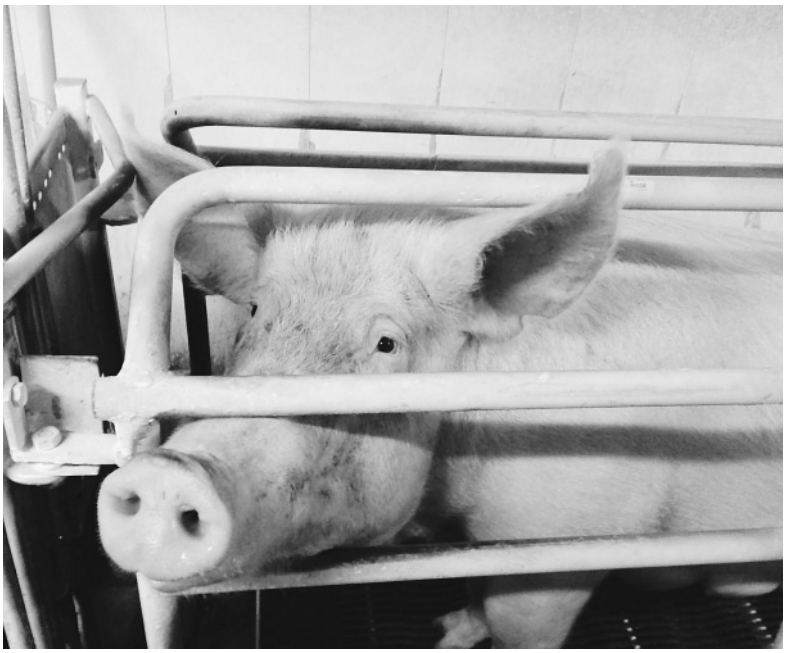

写真１　好奇心を示す母豚

写真２　活力のある哺乳子豚

浮かせてくれるので、とても清潔になります。お勧めです。

淘汰（ちゃんと育てられなくて、ごめんね）

日本人は淘汰ができない、と海外から来られた方は驚かれます。虚弱豚のその後を見て、どんな影響があるのかを見てみましょう。

▼病気感染して、ほかの豚に伝染する→元気な豚は、病気の進行が速いので、急死するケース。

▼出荷日齢になっても成長が遅れ、農場回転が遅くなり、結局うまく育たなくなるケース。

▼出荷日齢になっても成長が進まず、最後に淘汰せざるを得ないケース。

豚本来の役割である、出荷されて私たちの食品として役に立つどころか、他の出荷豚の成長の足をひっぱる存在になってしまいます。

淘汰が日本で進まない理由

淘汰が日本で進まない理由として以下のことが挙げられます。

▼日本での概念や技術普及が進んでいない。

▼主観的判断。客観的な判断方法が分からない。

▼淘汰のやり方が現場で実践としては方法は豚に優しくない。

▼薬品の使用制限がある。

淘汰対象の豚

淘汰対象の豚は

▼明らかに生時体重が少ない（同腹の他の子豚と比較して）。

▼離乳時に小さく、毛が逆立っている。

▼奇形。

あなたの淘汰の判断基準は？

以下の中に該当するものがあるか、一度考えてみてください。

①淘汰は絶対にしないと決めている。だから、次の②～⑤の豚がいても、見なかったことにして毎日仕事をしている。

②生まれたときに、明らかにほかの豚に比べて半分以下の大きさ。

③下痢をして、骨が見えている豚。

④離乳時に小さく（もしくは△△kg以下）、毛が逆立っている豚。

⑤離乳時に小さく（もしくは△△kg以下）、肺炎を起こしている病豚。

現在、日本で特に決まったマニュアルはありません。ですが、農場の淘汰基準を決めておくことをお勧めします。

最近、日本でも聴かれるようになってきた、アニマルウェルフェアという概念があります。しかし、この考え方では、豚が生きる間しっかりその豚本来の能力や、命をまっとうできることを人間がサポートするという概念ですので、この中では、淘汰に肯定的です。

日本では、欧米諸国と違い、近代まで生活者からのアニマルウェルフェアの要請がなかったため、業界および獣医師の教育でもこの段階の知識を得る機会がありませんでした。

しかし、今後消費者の意識がこちらに向いてくることは避けられないと思います。

そのときに、私たちができるのは、いかに主観的でなく、客観的な知識を得て、対応していけるか、です。

ですから、自分の判断基準を持っておくことは、まず第一歩になると思います。

獣医大学でも、今後この分野の教育が始まっていくようです。話がそれました。

また、淘汰という行為に対して、スタッフの方が精神的に耐えられないことを何度か見ています。多くの人のパラダイムというものを勉強してきた立場からコメントさせていただくと、特に日本人は、何かに依存して人生を送っている傾向があるからです。日本人は（これは日本だけじゃなく、アジア全体ですが）、素質的に主観的な民族なのです。このパラダイムからは、あえて意識しないと思考の習慣から抜けることが難しく、命を奪うことだけに焦点を当てて、自分が悪いことをしているという罪悪感を持つことがあるかもしれません。

ですから、精神的に受け入れられるようになってから実施することをお勧めします。しっかり自分でなぜ、淘汰が必要なのか、答えを出してか

ら、実施してください。

人間の食べ物をつくる行動という原因（人為的な交配）の結果として、生まれてきてくれた命に心から感謝し、淘汰する豚を最大限少なくすることが大切です。

私個人としては、農場内でもこの豚の死に対するストレス回避の教育がアニマルウェルフェアの概念とともに必要だと考えています。

淘汰しなくてよいような管理

もちろん、淘汰しなくてよいような管理を目指しましょう。

分娩舎できちんとウェルカムな管理が実施されていれば、私の経験では、哺乳中の事故頭数は一腹当たり〇・五～〇・八頭程度の間に入ると思います。もし、子豚死亡頭数が一腹当たり一・〇頭以上であれば、何か管理上でおかしなことをしている可能性があると考えて、かかりつけの獣医さんと一緒に管理を見直すことをお勧めします。

なるべく淘汰しなくてよい管理をしている農場では、淘汰が当たり前ではなくなりますし、農場内の調子がよいのが普通になるので、逆に淘汰の意義も理解できる力がつき、一つの仕事として取り組めるようになります。

写真３　離乳時の保温も忘れずに

写真４　離乳舎

離乳

さて、お母さんから、卒業します。子豚には、離乳時に精神的ストレス、環境ストレス、餌ストレスがかかります。何もかもが変わる瞬間です。

なるべくストレスを除いてあげ、そして、余計なストレスをかけないようにしましょう。また、保温、餌、水などの管理を徹底しましょう（写真３）。

離乳舎へ移動

離乳舎へ移動します。

離乳舎でも、ウェルカムな管理をしていただければ、子豚は間違いなくすくすくと育っていくでしょう^^（写真４）。